

触感擬態語と色彩における感覚間協応が感情反応に及ぼす影響

馬 靖 怡

感覚間協応とは異なる感覚モダリティ間の非恣意的な関連性のことであり、色と触感の間でも観察される。感覚間協応は認知処理に影響を及ぼすため、色と触感情報が同時に提示される場合、対応関係の有無が生じた印象に影響を与えることが明らかにされている。しかし、触感情報として擬態語による言語表現を用いた場合の色との対応関係、および同時提示した場合の対応の有無が印象に与える影響については明らかでない。本研究では、色と触感擬態語の対応の有無が快・不快感情と奇異感に与える影響を検討するために、2つの実験を行った。実験1では色相とトーンが異なった8の色サンプルと、10種類の触感擬態語を用いてシェッフェの対比較実験を行った。30名の参加者に、スクリーン上で提示された2つの色を比較して、触感擬態語と一致する程度の相対的な評価を求めた。その結果、色と触感擬態語に感覚間協応が存在することおよびその規則性が明らかになった。実験2では、実験1で得られた結果をもとに、各触感擬態語とそれに一致する、または一致しない色を組み合わせた刺激を作成した。52名の参加者は、スクリーン上で提示された一致刺激10種類、不一致刺激10種類、色のみ刺激6種類、ことば（触感擬態語）のみ刺激10種類に対して、快・不快感情と奇異感に関する16対の評価語でSD法評定を行った。分散分析の結果、不一致刺激において奇異感が高まる効果が見られた。また、快・不快感情評定については、色や触感擬態語それぞれの持つ感情価の影響を考慮する必要が考えられたため、感情価ごとに一致・不一致の影響について探索的に検討した。分散分析の結果、ポジティブな感情価を持つ色や触感擬態語のみで構成された刺激のうち、快感情評定はことばのみ刺激で最も強く、不一致刺激で最も弱く、一致刺激と色のみ刺激では差が見られなかった。ネガティブな感情価を持つ刺激では、一致刺激とことばのみ刺激が色のみ刺激より強い不快感情を喚起した。これらの結果は、ポジティブな感情価を持つ刺激の間では、感覚間協応による対応の無さは快感情を低める効果があることと、触感・触感擬態語が色より程度の強い快・不快感情を喚起する可能性があることを示唆している。